



AIを活用できる 薬剤情報とその運用

寺内恭平

藤田医科大学ばんたね病院 薬剤部
藤田医科大学医学部薬物治療情報学 特別研究員
上級医療情報技師



FUJITA HEALTH UNIVERSITY BANTANE HOSPITAL

藤田医科大学 ばんたね病院

Copyright(C) FUJITA ACADEMY All RIGHTS RESERVED

医療現場(薬剤領域)におけるAIの活用

(1) 薬剤適正使用の最適化

- ・ 薬剤過剰投与、相互作用リスクを検出
- ・ 投与ミス、薬物アレルギーを防止
- ・ 最適な薬剤選択や投与量を提案
- ・ 医療費の適正化や保険制度の改善

(2) ファーマコビジランス (薬剤安全性監視)

- ・ 副作用報告データを分析し安全性シグナルを検出
- ・ RWD(リアルワールドデータ)を解析し新たなリスク因子を特定



FUJITA HEALTH UNIVERSITY BANTANE HOSPITAL

Copyright(C) FUJITA ACADEMY All RIGHTS RESERVED

医療データの二次利用の実例

電子カルテは医療機関毎に異なるため、これを他院のEHRと統合したとしてもデータの分析は難しい

AIを活用できる薬剤情報

表1. 薬剤のデータ分析を行うための要素

名称	概要	例	利点	課題
医薬品名称	製品名	(向)ハルシオン錠0.25mg トリアゾラム錠0.25mgCH	可読性が高く活用しやすい	実際の名称と異なるものがある システムへの負荷が大きい
個別医薬品コード (YJ)	医薬品毎の12桁のコード	1124007F2026 1124007F1143	実装率が高い 疑似的に成分一致が判る	著作権(企業が作成) 収載医薬品のみ
HOTコード	複数の医薬品コードを互いに関連づけるコード	100371003 120959402	厚労省の標準	実装率が低い データガバナンス
GTIN(GSI)コード	国際的に統一された識別コードで流通に使用	14987114932003 14987792168718	医薬品の実物と対応しトレーサビリティに活用できる	データ取得に難 1製品に複数存在し細かい
ローカルコード	施設 / システム毎で運用するためのコード	ハル001,1004659 トリア002 ,1005866	施設毎で柔軟	施設、システム間の整合性 データ整備

運用 -医療データの二次利用のために-

医療データの二次利用には薬剤コード体系の統一と薬剤データ基盤が必要である。薬剤情報には多様なコード体系が存在しており、適切な運用が求められる。

- ・ 薬剤マスタには他院と共通の薬剤コードを実装する
ワクチンなどの非保険薬にもコードはあるので整備する(空白にしない)
- ・ 薬剤コードのみで運用すると可読性が低下するため製品名の整備も重要である
ただ、システムの制限で文字数を短縮し略称で運用せざるを得ない施設も多い
ベンダに対し要望を伝え、業界として環境を整える必要がある
- ・ データの相互運用性を前提とした薬剤情報の整備は従来よりも
メンテナンス基準が煩雑になる可能性が高いため、
専門知識を持つ人材の育成やツールの導入を検討

まとめ

医療AIが進歩してくるにつれて、RWD分析がしやすいデータの運用が課題となっている。AIを活用できる薬剤情報とは、全ての医療用医薬品について医療機関を超えて整合性が担保された薬剤コードが整備されたデータのことを指す。

薬剤コードを適切に運用することでRWDの質が担保され、医療データの高度な解析が実現し、より安全で質の高い医療の提供が可能になる。